

# 琉球大学学術リポジトリ

## やがて楽しき外国語

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 正臣 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41210">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41210</a>

# やがて楽しき外国語

「大学英語」担当 小林正臣 (教育学部)

海外に精通しているわけでもなく、機器を駆使しているわけでもなく、かといって感性で勝負しているわけでもなく、ましてや容姿で魅了しているわけでもない——そのような者がプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞するという事は、文字通りの意味で「有り難い」です。しかし実際には、受講者および関係者に対して感謝するという意味で「ありがたい」です。その感謝の気持ちを、以下では大学での英語教育（大学英語）と担当科目である「大学英語」に対する思いとして述べますが、あくまで思いなので「こうすれば授業がよくなる」という文章ではないことをここで述べておきます。

## 1. 何を教えてよいのかわからない

1990年代から始まった東京大学教養学部における英語改革。その具体的成果である『The Universe of English』は、他大学でも広く使われたことから、異例のベストセラーとなりました。その序文を読むと、次のような一文があります——「とにかく『教養英語』の教科書というものは……という無意味な一般論はやめにして、編集にたずさわった教師たちのこころざしを述べておこう」(vi)。すなわち、大学英語をめぐる一般書ではなく、現場教師たちによって編まれた実践書であるというのです。そして実際の編集にたずさわった一人である内野儀は、ある著書のなかで大学英語についてよく言われることを二つに分けています。ひとつは「現状批判側」の意見で、いまどきの学生は知性に対する関心がなく、それを受け入れるだけの素養もないと嘆きます。もうひとつは「現状肯定型」の意見で、ほとんどの学生が企業に就職するのだから、実用的な英語を教えるのは当然であると考えます。

上記の分類において前者は、英語教育は「読む」ことから始まるという信念のもとに、実用よりも教養としての英語を重視しています。琉球大学の共通教育においても、以前までは英語講読に関する科目が偏重されていました。他方の後者は、教養よりも実用としての英語を重視しています。日本で新たに適用された英語到達度指標 CEFR-J においても、4技能の一つである「話す」は細分化されて「コミュニケーション」と「プレゼンテーション」に代わり（ゆえに 5 技能となり）、より実用性を求めていることがわかります。また現在では、日本の多くの大学が TOEIC や TOEFL における点数を英語力の主たる指標にしています。そして両者に違和感を覚える内野は、次のように述べています。

ことは至極単純なことで、たとえば、学生たちの顔を授業中に凝視するだけで事足りる。そのときぼくたち英語教師は、何を教えてよいのかわからないという事実を前にして、そしてまた、教育などというものはなから信じていない学生たちを前にして、まずはおびえ、たじろぐはずなのだ。教育を信じることを強要することなどできはしない。どうすれば教育が成立するのか、問題はそれしかない。ただしそれは、理念の問題ではなく実践の問題である。あらたな教育の理念ではなく、きわめて現場的な戦略と方法がまずは考えられねばならない。そしてそれは、これまでの英語教育をめぐるあらゆる理念は失効しているという認識から生み出されなければならない。何を教えるのかは、そのあとに問われてくる問題である。(125)

筆者の場合、教育学部指定クラスを担当したので、「教育などというものはなから信じていない学生たちを前にして、まずはおびえ、たじろぐ」ことはありませんでした。しかし専攻に関係なく言える

ことは、大半の受講者は新入生ということです。つまり、相手は自分のことをまったく知りませんし、自分は相手のことをまったく知りません。では「どうすれば教育が成立するのか」。そうした手探りの状態で教壇に立つと、どれだけ入念にシラバスが作成されていても、思ってもいない感覚に襲われることがあります。「何を教えてよいのかわからない」——これはとても身に覚えがある感覚です。

なぜ自分は、この科目を、この人たちに教えているのか。なぜ自分は、この教室に、この人たちを集めているのか。こうして湧いてくる疑問が卑屈であるか真摯であるかは措いておくとして、それに少しでも答えるためには、たしかに内野が言うように「きわめて現場的な戦略と方法がまずは考えられねばならない」。担当者と受講者のどちらにとっても一期一会となりがちな共通教育科目においては、そのつど直面する問題に、そのつど対処していくしかありません。もちろん、これは「大学英語」を担当するにあたっては例外ではありません。

## 2. 「大学英語」あるいは文字通りの「外国語」

「大学英語」は4技能（聞く・話す・読む・書く）すべてを扱います。共通のシラバスが用意され、共通の教科書が使用され、そして共通の資格試験（GTEC）が実施されます。このように共通教育を字義化したような科目なので、各自で技能を学びつつも緩やかに共通した認識や経験を得るという、言うなればソロとグループでの活動を並行していくようにしています。

### ① 聴く

教科書にはリスニング用の音声と問題が用意されています。音声はダウンロードできるので、教室以外でも一人で聴くことができます。しかし教室で聴くときは、まず各自で聴いて問題に答えたあと、グループで確かめ合います。一人で聴く・一人で解くというのは概して孤独な作業です。もちろん試験対策などには有効な作業ですが、せっかく教室に集まっているのですから、話し合っても不自然ではないでしょう。そうすると自力で解こうとしない場合も考えられますが、実際はあまりないように思えます。今後もないことを祈りつつ、問題を先送りしています。

### ② 話す

いろいろな設定に応じて話してもらいます。授業を始めるときの準備運動として、外国人に日本を紹介するなどの平凡な設定にするときもあります。しかし、そういう場合は答えにくい質問をします。たとえば、「忍者について何でも教えてください」（Please tell me anything about Ninja）と訊くと、なかなか即答はできません。それは英語力の問題だけでなく、忍者について（筆者を含め）よく知らないからです。しかし複数の学生に訊いていくと、少しずつイメージが共有され、少しずつトピックが逸れていきます。そうして脱線しつつも本線である授業へと滑らかに移行できるといいのですが、脱線したままに終わることが多いです。そして脱線しすぎて予定していた範囲を終えられないこともあります。したがって往々にして、導入・展開・総括という基本的な組み立てができていません。

### ③ 読む

教科書に載っている文章を読むときは、まずは読んでもらいます。辞書は使わず、わからない単語があっても、とりあえず飛ばして読んでもらいます。文脈から推測する習慣を身につけてほしいからです。読み終えても気になる単語の意味は、辞書（または辞書も搭載した機器）で調べてもらいます。そのあとにクラス全体で内容理解の確認をしますが、この作業は要注意——そして要反省——です。学生の訳読を聞いているときは教員が眠くなり、教員の解説を聞いているときは学生が眠くなるから

です。いちおう英語で書かれた文学を研究していますが、じつは（と言うのも大げさですが）英文を読むことに関する活動はあまり得意ではないです。改善しようと何度も思いつつ、現在に至ります。

#### ④ 書く

まず英作文の基本的な構成（序論・本論・結論）と、文章を組み立てるときによく使う語句を紹介します。そして教科書の題材にしたがって各自で書くというのが基本作業ですが、ときにはグループで書くこともあります。たとえば、各グループがラブレターを書いて発表するという活動をしたことがあります。結果的には、文章が散文的すぎても情熱的すぎても伝わりにくいということをクラス内で共有しました。しかし教科書には用意されていない活動なので、最近は自戒して行っていません。

どうでしょうか？ 強いて特徴を挙げるとすれば、グループワークに重きを置いているという程度でしょうか。これなら自分の授業のほうがいいと思った方も少なくないでしょう。ある意味で、それは正しい感想です。というのも、筆者が英語を学びつつけている大きな理由の一つは、自分の英語力はお粗末であると、自慢でも謙遜でもなく認識しているからです。先述した東京大学における英語改革の中心人物である柴田元幸は、「私と英語」と題するエッセイのなかで次のように告白しています。

といっても僕はべつに、外国語というものは学べば学ぶほど奥が深いことを思い知らされる、とか、いまさら言ってもはじまらない一般論を言おうとしているのではない。単純にもっと現実的なレベルで、僕の英語力はチャチなのである。英語の映画を字幕なしで見たらわからないところがいっぱいあるし、ラップの歌詞なんて本当にギリシャ語のごとくチンプンカンプンだ。読む方なら何とかかかるといって、これがまた、トロい。日本語を読む速さを 1 とすれば、英語を読む速さはせいぜい 0.3 である。内容吸収率にしても、日本語を 1 とすれば英語は 0.4 くらい。したがって、読みの総合的効率としては、日本語の 1 に対し、英語は 0.12 ということになる。要するに、僕にとって、英語とは相変わらず、文字通りの「外国語」なのである。(144-45)

もし「外国語」でありつつけることに意義を見出すとすれば、それは少しでも聞けたり、話せたり、読めたり、書けたりするだけでも、それなりの楽しみをずっと得られるということです。「英語の映画を字幕なしで見たらわからないところがいっぱい」でも、英語の字幕を読んでわかる楽しみは生きています。「ラップの歌詞なんて本当にギリシャ語のごとくチンプンカンプン」でも、わからないゆえにわかるかもしれないという楽しみが生まれます。小説家であり翻訳家でもある村上春樹には「やがて哀しき外国語」というエッセイがありますが、これを振れば「やがて楽しき外国語」ということです。この楽しさをどのように感じてもらうか——それをもって授業に対する真の評価は決まるのでしょうか。

#### 引用文献

内野儀『メロドラマの逆襲——私演劇の 80 年代』勁草書房、1996。

柴田元幸『舶来文学 柴田商店——国産品もあります』新書館、1997。

東京大学教養学部英語教室編『The Universe of English』東京大学出版会、1993。